

変光星 森口奈緒美著

飛鳥新社

自分の世界

- 物心ついたとき、私は自分の世界の中に住んでいた。そしてかなり長い間、その中だけに止まった。幼児というのは誰でもそうであるらしいが、私の場合は、それが異様に長かった。それは閉ざされた世界などと言われるような、容易なものではなく、いろいろなものが何もかも、ミクロの世界の一点に、凝縮して詰まっていた。

電車の中で

- 大好きなはずのチンチン電車に乗ろうとすると、私は必死になって怖がった。見知らぬ人が次々と入ってくるし、それらが自分の領分などお構いなしに、それぞれが予測のつかない場所に、座ったり立ったりするからだ。

「親」という概念

- 幼児の頃の私には、「親」という概念が全然なかったらしい。親に寄り添ったり抱かれたりすると限りない安心感で満たされるものらしいが、親を愛したとか甘えたとか、そういう経験がまるで思い出せない。

「みんな」のなか

- 私は大勢の子どもたちと一緒にされ、「みんな」と呼ばれる一団の子どもの一部となった。幼稚園では集団遊戯とお遊びの時間ばかりなので、「みんな」の中にいるのが嫌だった。それは自分の世界が吹き飛ばされる場所だった。いつ、些細な災いが降ってくるかわからなかった。

集団での遊び

- 集団での遊びは破壊であった。つまり「みんな」にとっては集団の破壊であり、わたしにとっては自分の世界の破壊であった。お互いにいいところは全くなかった。
- 自分と同じような子どもばかりの教室が煩わしくて、「失人」ばかりがいる騒音のない職員室の中に走り込んだ。

受け入れられる」音楽

- さらに「2種類」あることに気がついた。一つは、耳を経由して物理的な感覚として聞こえてくるもの、そして一つは、直接、頭の中から鳴り響いてくるものである。すでに聞いたものが聞こえてくることもあったし、今まで聞いたこともない音が、中空から突如、聞こえてくることもあった。

「さあ、行こう」

- リーダーがいきなり、背後から「さあ、行こう」と声をかけ、背中を叩いた。私は突然のことだったので、ショックでかんしゃくを起こし、そしてそれはそのまま喧嘩になった。相手もまた、予期しない私の反応に驚いた。

仲良くすること

- 私は、友人とも、仲良くやっつくものだと思っただけで、コミュニケーションの仕方が解らなかった。仲良くしなければと思う一方、自分なりに「許せない」事があれば、それが目上だろうと目下だろうと、相手が強かろうと弱かろうと、おかまいなしにむかっていく癖があった。

カラーテレビ

- 「カラーテレビ」を、うんと近くで見ると、丸くて、ちっちゃくって、三角」なのが、いっぱい寄り集まってできている。私は小さな水玉のダンスをいつまでも観察した。それが集まって画面になるということは、理屈では解っていても、実物を見ると、やっぱり不思議な世界だった。

感覚の混乱

- 前からきたボールが、ブーメランのように背後をねらい打ちしたように感じられたのである。どうやら私は知らないうちに、そのときは、左右だけでなく、前後も混乱したらしい。私が自分の異常さに気づいたのは、このときがあるいは最初だったかも知れない。

なぜ「変」なのだろう

- 気がつくと、「疑問」という漆黒の中にいた。自分の力だけではどうしようもない、巨大な果てしない空間の中に、点のように小さな自分がそこにいた。なぜ「変」なのだろう。どうしていつも周囲から浮いてしまうのだろう。

学校の規則

- 「学校」には、たくさんの「規則」がある。決まりにこだわりたいが自閉症児にとっては、これらを守るのは簡単なことに思えた。校章のバッジの位置、正しい廊下の歩き方、登校や下校の時刻、掃除のマナーや日直の当番、等々。だからまず、これらを一つずつ守っていけば、学校に適應する助けになるのではないかと考えた。

集団から浮き上がる

- 私は「集団生活」の中で、「力を合わせる」ことの大切さを心から認識していたはずだった。ところが、にんしきはなんとかできても、それを実行に移す手段が不足していた。学校で決められた当番とか掃除とか規則とか、その他「集団の中でやらなければならないこと」にまじめに取り組んでいたはずなのだが、なぜか「集団」から浮き上がってしまう。

感覚過敏

- 知覚あるいは感覚過敏ゆえ、この世の物事に生真面目に取り組みすぎる結果、かえって疎まれて、自衛本能的に背を向けてしまうことが多いので、自閉的に見えるのは実は二次的現象にすぎないと私個人では思うのだが...

集中レンズの働き

- 自閉症の人が、なぜか多く持ち合わせている特徴は、社会性の欠如の代償ともいえるものであるから、たとえるなら「社会性」が拡散レンズの作用の結果だとすれば、「創造性」は集中レンズの働きの結果とも言えるだろう。誰でも集中すれば創造的なことはなせるものの自閉症の人の場合は、それらが偏った結果、極端なのである。

別の角度で物や現象の本質を探究

- 彼らは協調性には欠けているかも知れないが、その代わり、特殊な世界でしあんしたり、べつの角度で物や現象の本質を探究する能力を、生まれつき賦与されているからである。

才能開発

- 大人は、子どもの教育や才能開発に、信じられないほどにお金と手間をかける。しかし同時に放っておいても自力で伸びていく人材に対しては、信じられないほどに厳しく当たり、きょういくやくんれんというののもとに、その可能性を常に規制し、否定し、潰してきたりはしなかっただろうか？